# 19 世紀イギリスにおける自由教育論争に関する研究
## ――教養概念をめぐる T. H. ハクスリーと M. アーノルドの論争に焦点を合わせて――

本宮　裕示郎

## 【論文要旨】

本研究の目的は、T. H. ハクスリーと M. アーノルドの論争に焦点を合わせて、19 世紀イギリスの自由教育（liberal education）論争を再整理し、両者が提示した教養（culture）概念の意義と課題を明らかにすることである。

ハクスリーとアーノルドは、19 世紀半ばから末にかけて、幅広い分野でそれぞれに活躍しながら、当時の教育界にも大きな影響力をもった。ハクスリーは、生物学者として C. ダーウィンの進化論を擁護したことで知られる。王立鉱山学校で教鞭を執る傍ら、科学教育に関する調査委員会への参加やロンドン学務委員会での活動を通じて、教育に関する講演や提言を度々行った。一方で、アーノルドは、オックスフォード大学在学中から詩人として活動し、批評家に転じてからは、文学や社会、政治など、多方面なテーマについて論評を展開した。これらの活動に並行して、30 年以上の間、勅任視学官として国内外の教育機関を視察し、教育に関する報告書や論文も多数残した。

ハクスリーとアーノルドが活躍した当時、自由教育のあり方をめぐって、J. H. ニューマンや J. S. ミル、H. シジウィックなど、当時を代表する知識人の間で論争が重層的に展開された。いわゆる自由教育論争である。受けられる教育が社会階級に規定されていた当時のイギリスでは、自由教育とはエリート教育と同義であった。それは、中等教育段階でのパブリックスクール、高等教育段階でのオックスフォード大学、ケンブリッジ大学で享受する、人文主義的な教育を意味した。しかし、19 世紀中頃には、パブリックスクールでは古典語の暗記ばかりが繰り返され、両大学ともに有閑知識人のクラブと化していたことを受けて、自由教育の存在意義を疑問視する声が挙げられていた。一方で、イギリスに先駆けて科学教育を取り入れていたドイツやフランスの産業・工業面での急激な発展や、実用性を重視し科学的知識の普及を訴える H. スペンサーの主張をきっかけにして、自由教育に科学教育を導入すべきという声も高まっていた。その結果、自由教育の目的や内容をめぐって、主として、科学教育を推進する立場と文学教育を擁護する立場の対立として、自由教育論争が引き起こされた。なかでも、ハクスリーとアーノルドは、自由教育を通じて身につけるべき教養が人生批評（criticism of life）であることには同意しながら、科学と文学をそれぞれ代表する論者として、論文や講演を通じて論争を繰り広げた。

自由教育論争は、ルネサンス期の自由教育に対する改革要求という側面を併せもっていた。古代ギリシャでは、自由教育は自由人のための教育を意味した。古代ギリシャの自由教育では、真・善・美の追求を通じて閑暇を美しく過ごし、人間性を全体的・調和的に発展さ

せることが理想とされていた。そのため、実用性を重視し生活で必要なものを満たすことを目的とする、奴隷のための職業教育とは明確に区別され、真・善・美と実用性は一線を画していた。ルネサンス期になると、自由教育の再興を求めて「古代ギリシャの精神」に触れるために、古代ギリシャや古代ローマの古典作品を学ぶことが重視された。しかし、時が経つにつれて、「古代ギリシャの精神」に触れるという目的が後景に退き、人間性の全体的・調和的な発展という古代ギリシャの自由教育の理想も失われた。その代わりに、古典作品の学習自体が目的へと置き換えられ、人文主義的な教育という色彩が強まることになった。その後、自由教育は 19 世紀に至るまで貴族的・特権的・閉鎖的な性格を増幅させながら、ヨーロッパ諸国のエリート教育として強固な伝統を形づくっていった。そして、19 世紀イギリスにおいて、エリート教育としての伝統的・人文主義的な自由教育に対する批判の上に、功利主義的・実用主義的な科学教育を要求する声が重なることによって、自由教育論争が引き起こされた。

国内外の先行研究では、ハクスリーとアーノルドの間で生じた論争を主な手掛かりにして、教養概念をめぐる両者の思想の比較検討がさまざまな角度から行われてきた。しかし、先行研究では、ハクスリーとアーノルドが従来の自由教育に対して抱いていた問題意識は見逃され、自由教育論争において両者の論争が果たした役割も明らかにされていない。さらに、ハクスリーとアーノルドが抱いていた従来の自由教育に対する問題意識や、人生批評としての教養概念に込めていた期待も考察の対象とはならず、両者が提起した教養概念の意義を十分に検討することはできていない。

先行研究の成果と課題から、本研究では、以下の 3 つの課題を設定した。

1 つ目の課題は、教養概念をめぐるハクスリーとアーノルドの論争が、自由教育論争で占める位置を明らかにすることである。多くの先行研究では、自由教育論争において、ハクスリーとアーノルドは科学教育推進派と文学教育擁護派にそれぞれ位置づけられている。しかし、自由教育論争を科学と文学の対立と見なし、両者の区別を強調するかぎり、教養概念をめぐって両者がなぜ論争することになったのか、論争を成り立たせていた共通の土台を見いだすことはできない。19 世紀イギリスにおいて新しい自由教育のあり方を模索した両者がどのような問題意識を共有していたのか、他の代表的な論者との比較検討を通じて、両者の論争が自由教育論争で果たした役割を明らかにしていく。

2 つ目の課題は、「古代ギリシャの精神」との関連のなかで、ハクスリーとアーノルドの教養概念の比較検討を行うことである。ダーウィンの『種の起源』に象徴される進化論の登

場によって、人間を神の創造物と見なす人間観が揺さぶられる事態が生じ、自由教育の理想像を方向づける人間観そのものが不確かなものとなっていた。しかも、産業主義化が進行するなかで、科学技術の発展が生み出した機械によって物質的な豊かさが実現され、実用性にも価値が認められ始めていた。こうしたなかで、ハクスリーとアーノルドがどのような人間観を抱き、真・善・美と実用性の関係をどのように解釈していたのか、明らかにしていく。

3つ目の課題は、教養概念を通じて、ハクスリーとアーノルドが、どのような道徳観を抱き、道徳性をどのように涵養することを目指したのか、明らかにすることである。科学の新興は実証性や客観性の価値を押し上げた反面、聖書で語られる奇蹟や預言の否定を招き、キリスト教信仰の脅威となっていた。科学教育が教育内容に組み込まれていくなかで、両者は、科学にどのような価値を見いだしていたのか、科学に対するそれぞれの受け入れ方を検討し、さらには、それぞれに展開した初等教育カリキュラム論を検討することによって、理論と実践の両面から両者の道徳観の中身を明らかにしていく。

これらの課題に取り組むことを通じて、本研究では、ハクスリーとアーノルドが「古代ギリシャの精神」にもとづく人間性の全体的・調和的な発展をそれぞれどのように解釈し、19世紀イギリスにおいてどのように実現しようとしたのか、言い換えると、両者が教養概念を通じて求めた人間形成の具体像とそのための手段を明らかにすることを目的とする。まず、自由教育論争におけるハクスリーとアーノルドの位置づけを整理し（第1章）、両者の間で生じた論争をもとに、「古代ギリシャの精神」との関わりから両者の教養概念を比較検討する（第2章）。次いで、道徳性の涵養という観点から、科学に関するハクスリーとアーノルドの思想的な変遷を確認する（第3・4章）。最後に、それぞれに展開された初等教育カリキュラム論にもとづいて、両者の教養概念をカリキュラム・レベルで比較検討する（第5章）。これらの共時的・通時的かつ理論的・実践的な比較検討をもとに、「人間とは何か」、「真・善・美と実用性をどのように架橋するのか」、「どのような道徳性をどのように涵養するのか」といった問いに対する両者の答えを整理し、それぞれが教養概念として掲げた人生批評の中身を明らかにした。各章の概略は、以下のとおりである。

第1章では、ハクスリーとアーノルドに加えて、代表的な論者と見なされるニューマン、ミル、シジウィックの自由教育・教養論を比較検討し、自由教育論争におけるハクスリーとアーノルドの位置づけを整理した。5人の自由教育・教養論には、知性と道徳性の関係への言及が含まれ、そのために幅広いカリキュラムが必要とされていた。5人の問題意識は、知性と道徳性の関係のあり方に向けられていたという点では共通しており、5人の論者にとっ

て、自由教育を通じて身につけるべき教養とは、知性と道徳性の涵養をともに実現する知の体系であった。その一方で、ニューマン、ミル、シジウィックが、エリート教育としての自由教育の改革を試みたのに対して、ハクスリーとアーノルドは、自由教育をすべての子どもが受けられる教育へと改革することを試みていた。

第 2 章では、ハクスリーとアーノルドが、「古代ギリシャの精神」の再興をともに求めたという共通点に着目して、両者の教養概念を比較検討し、教養概念に関する両者の主張の異同を整理した。その結果、古代ギリシャでは交わることのなかった真・善・美と実用性の関係をそれぞれ異なる形で受け入れていたことが明らかになった。ハクスリーは、真となる自然法則から、善・美・実用性が導かれると考え、自然法則を見いだすことを可能にする科学教育の重要性を強調した。対して、アーノルドは、実用性の過度な要求によって、社会に無秩序が生じたことを問題視し、秩序を取り戻すために、真・善・美を兼ね備えた優れた詩歌をはじめとする文学教育を求めた。つまり、ハクスリーが、真と善・美・実用性の関係に組み換えることで、真・善・美と実用性の対立を解消しようとしていたのに対して、アーノルドは、真・善・美の再興によって、真・善・美と実用性の関係の均衡を保つことを求めていた。

第 3 章と第 4 章では、科学の新興が当時のイギリス社会に与えた影響の大きさに鑑みて、科学に対する両者の受容の仕方に着目して、それぞれの思想的な変遷を考察した。

第 3 章では、ハクスリーの自然観の転換に着目して、科学教育観を検討することによって、自然法則を「知ること」が道徳的に「行うこと」をどのように導くのか、科学教育が道徳性の涵養を導く一元的な論理について考察を行った。考察の結果、ハクスリーの自然観は調和する対象から競争する対象へと単純に転換したわけではないことが明らかになった。ハクスリーは、人間を自然の一部と見なし、人間をも観察の対象に加えることで、道徳性が涵養されると一貫して考えていた。晩年期の講演・論文『進化と倫理』でも、人間関係のなかで必要とされる良心や共感によって道徳的な行為が導かれると見なされており、自然法則と道徳法則はともに、科学的な方法で培われる注意深く正確な観察によって一元的に見いだされるものであった。ハクスリーにとって、科学的に自然を「知ること」は人間を「知ること」と同義であり、ひいては道徳的に「行うこと」を可能にすると考えられていた。

第 4 章では、アーノルドの科学観の変遷を検討することによって、アーノルドが採用した「知ること」と「行うこと」の二元的な関係がどのようにして成り立つのか、その論理について考察を行った。考察を通じて、アーノルドの科学観の変化は、先行研究が指摘するよ

うな、1860 年代に科学熱が最高潮に達し、1870 年代以降に冷却していくという単純な変化ではなかったことが明らかになった。1860 年代のアーノルドの科学観には、知的な価値だけではなく、公平性や忍耐強さといった道徳的な価値も付与されており、知的な価値と道徳的な価値に対して、科学と文学が果たす役割のすみ分けは不明瞭であった。一方で、1870 年代以降は、事実を「あるがままに見る」科学と、真実を「あるがままに見る」文学という対比から、科学と文学のそれぞれの役割が明確化・精緻化されていた。つまり、「あるがままに見る」という姿勢は一貫しながらも、科学の道徳的な価値が失われていく反面、自己の内面へと向き合うことを可能にする文学の優位性が強調されていくこととなった。アーノルドにとって、文学を「知ること」は、自己のなかにある最善の自己を「知ること」と同義であり、道徳的に「行うこと」が可能になると期待されていた。

第 5 章では、ハクスリーとアーノルドの初等教育カリキュラム論を比較検討し、すべての子どもが教養を身につけるためのカリキュラムという実践的な側面から両者の異同を整理した。先行研究では、両者が提示したカリキュラムは表面的には一致していると判断されてきた。しかし、科目構成を実際に比べると、表面的にも一致は見られず、ハクスリーが、子どもたちの生活のリアルを直視し、当時直面していた実際的な課題への対処も視野に入れたカリキュラムを構想していたのに対して、アーノルドは、いわばカリキュラムにロマンを抱き、実際の生活とは一線を画す、精神的な向上を一貫して求めており、両者は異なるカリキュラム観を抱いていた。さらに、ハクスリーは、さまざまな科目の基礎としての役割を科学に与え、アーノルドは、さまざまな科目を統合する役割を文学に与えていたという異同を指摘した。

終章では、各章の成果を整理し、両者の教養概念をイギリスの自由教育の思想史のなかに位置づけることを試みた。ハクスリーとアーノルドは、「古代ギリシャの精神」の再興をともに求め、真実を絶えず追求するなかで、道徳的な行為として知が表現されると考えていた。ハクスリーは、自然の事実のなかに真実を見いだし、自然法則を絶えず追求することによって、道徳法則が導かれると考えていた。一方で、アーノルドは、自分自身のなかに真実を見いだし、最善の自己を絶えず追求することを道徳的な行為と見なしていた。真実の在りかは異なるものの、両者ともに、真実を介して、知の追求と知の表現を両立させる論理を組み立てようとしていた。その両立を可能にするものこそ、知の体系として知性と道徳性をともに涵養する教養概念であった。そして、両者は、「いかにして生きるのか」を問う人生批評という名の教養概念をともに掲げながら、ハクスリーは世界との調和のあり方を示し、アーノ

ルドは自己との調和のあり方を示していた。両者の教養概念は、対立的ではなく相補的に、イギリスの伝統的な自由教育を象徴していたのであり、逆に言えば、ハクスリーは自己との調和に、アーノルドは世界との調和に課題を残すこととなった。

最後に、本研究に残された課題として、ハクスリーとアーノルドがお互いに与えた影響と、両者が後世のイギリスと日本に与えた影響を明らかにすることを挙げた。